

解脱への契機に立つ「觸」考察の推移

山本啓量

原始佛教に於て、解脱や涅槃の契機の根基となるものは觸施設 phassapaññatti である。煩惱は觸に由つて生じ觸を通して滅する所から、觸を正觀することによつて解脱や涅槃に至ると強調する。觸については無量の觸が擧げられているが、一般には十六觸が設定せられ、殊に解脱への轉換には無明觸より明觸へ移行するとせられ、解脱への轉機をなすものとして空・無相・無願の三觸が考えられている。

緣起を見るものは法を見るという事が佛教の要點であるが、解脱涅槃の體解や體得が困難であるというので、緣起甚深と云われ、四分律には緣起と愛盡涅槃の二種甚深が掲げられている。相應部や雜阿含には六種の觸を本とする *phassa-samutlaka* 緣起を擧げて、あらゆる有爲法は觸を通して生滅することを主張するが、解脱への契機は生滅の契機に立つ觸を如實に知見するにあることを示している。觸の如實知見は

「集法を有するものは滅法を有す」「集法は滅法である」「そのものは觸によつて生じ、觸によつて滅す」と見ることであつて、是を集滅の法 *sanudayavayadhamma* を如實に知見すると云われ、その慧を生滅の慧 *udayāthagaminī pañña* と云われている。大毘婆沙論によれば「甚深の阿毘達磨とは、「空・無我と如實覺」「因緣生と如實覺」であるとし、如實知見を如實覺に置き易えたのは、原始佛教の如實知見が直觀的なるに對して、有部の如實覺は思惟考察的なるによる。

大毘婆沙論雜蘊には、「諸行中に於て如理に思惟すること能わざれば、能く世第一法を起すことなし」「如理に思惟すと云うは上品忍を顯わす」として、如理思惟する上品忍が世第一法を起す唯一の條件であることを示している。有部の教説では世第一法の一刹那の後、欲界の苦聖諦を緣じて苦法智忍を生じ正性離生に入り、次に見道十六行相中の十五行相まで「忍―智」の關係を繼續し、道類智忍までを未曾見の理を見とせられる。即ち聖諦現觀である。此の時、原始佛教の生

滅觀と異なり、四聖諦の各諦は其の理を別觀せられる。凡そ有部の思惟方法は、三世實有法體恒有の全體的「總體」に歸せらるべき法を、分析分別してその理を別觀するにある。大衆部が頓觀的な立場に立ち、四聖諦に關して一刹那に能く四諦を了知するに對して、有部は漸觀的な方法を取り、十六行相に十五刹那を経て道類智に至るとせられる。然るに原始佛教は煩惱が觸に緣つて生じ觸に緣つて滅する所から、集法は滅法であるとするのである。有部は分析的方法をとつて、時空の極端に夫々刹那と極微との無分割的な邊を思惟し、其處に實有を如理思惟した。従つて有部は原始佛教の生滅觀の理解について、同じく根蘊に一心か二心か一刹那か二刹那かの問題を提起して「二刹那の頃に一心は生を觀じ、一心は滅を觀するなり、相續に依り説きて生滅觀と名づく」と解釋したのである。即ち原始佛教の生滅觀が相即なるを時間的に分析して刹那の相續としたのである。

二

觸は根境識の三事重合によつて有りとせられるが、有部では根・境・識の一々を取り出して分別考察す。境と身分の根とは共に色に攝せられ、色を分析しその最後邊にあるものとして、「これ以上分析すべからず、睹見すべからざる」極微が立てられ、之を實有としている。

解脱への契機に立つ「觸」考察の推移（山本）

根に二十二根ありとする時は、眼等の六根・五受根・命根・男根・女根・信等の五根・三無漏根である。此のうち原始佛教に於て煩惱の生滅のための所依となるものは、眼等の六根と五受根とであり、信等の五根は觸所生の煩惱等を滅することの修習の爲の所依であつて、S. 12, 23 paṇḍarāya に「苦を緣として信あり」とし、順次、悅・喜・輕安・樂・三摩地・如實知見・離・解脱ありとし、解脱の爲の如實知見の根源に信を置いたが、S. 48, 4 東河に五根を説いて信→進→念→定→慧→信……と循環せしめて、五根の循環的な連續修習によつて、信等の五根が觸の成立に參加して、明觸に轉ずることを豫想せしめてゐる。（雜阿二六「此の五根に於て如實によく觀察せば、身見・戒取・疑に於て斷知す」俱舍論三六に「忍法中に必ず退墮せず、善根堅固にして、四善根の中の忍位に於て増上の義を得、故に根増上すと説く」「五根は善根堅固にして、四善根の中に忍位に於て増上の義あり、能く煩惱を伏し聖道を引くが故に立て、根となす」とあり）

根は俱舍論第三に「觸に緣つて受あり」と云うのみならず、「觸に緣つて根あり」とも云われ、五受と五根とが等しく觸によつて生ずると云つてゐるが、之は受にも最勝自在と光顯なるを認めて根としたのであつて、受↓根↓受と移行しつつ、觸の周邊に循環するものと見られる。根と受とが互いに循環増廣することは、如實知見の直觀の對象たる觸の重合の

三事の中より、特に根を抽象して考察した爲に起つた増廣的事實であり、觸を中心とする煩惱隨増の様相である。

この様な循環的矛盾は識に於ても見られる所であつて、五蘊に於て色→觸→受→想→行→識と移行する場合、色と受との間に觸を豫想するとき、五蘊の識と觸に於ける三事合の識とは相互に循環し、又内の識と外の名色とによつて觸があるとする場合にも、内の識と名の識とは互に重複し、又雜阿含の種子經等に、五蘊の各蘊に識が住して攀緣すると説かれる場合にも、識が循環して重複する矛盾が考えられる。之等は何れも觸を如實知見の直觀に於て把握することなく、識を取り出して觸關係の種々相を識の攀緣として見た時の觸の増廣の様相である。阿毘達磨ではこの識と根とを執拗に追求したが、識と根とは内の主觀の側にあつて對境と相對する以上、認識の根據が考察せられる時、何れが優先に立つかが問題となるのは當然である。此處に根見家と識見家との對立がある。眼等の五根が所依となつて、五識及び五識相應の心所が發されるとすれば、根が識に優先するが、眼等の五を立てゝ根となすのは、各自の境を了別する眼等の識に於て、最勝自在の義があるからであるとき、識が根に優先する（大毘婆沙論大種蘊、俱舍論三）、即ち根の増上は識の上の事實であるとしても、根は又識を發することになるので、識と根とは同一圓環上にあつて循環するものと云うことが出来る。

次に觸の構成要素としての根境識の一々に據ることなく、三事合の上の觸についても類似の問題がある。即ち大毘婆沙論根蘊に譬喩者の説として「觸は實有に非ず、三を離れて實の觸の體は得べからず」とし、俱舍論第十に經量部の説として「三法和合するとき名づけて觸と爲す」とし、三事と觸は同時關係にあるとするに對し、有部の説として「三和合するが故に別に觸生ず」とし、觸は三事合の後にあるとした。蓋し有部は實有を認めて剎那の移行を考えたのである。然るに同じく根蘊に「心心所は觸を以て命とし、觸に引かれ、觸に轉ぜられ、觸の力の故に現在前す」「一切の法は觸の集起する所なり、根は觸により生ず」とあり、觸は三事の前にありとも、或は後にありともせられている。觸は所生の心心所でありながら、心心所に即しつゝも、心心所を引きゆく力動の根源となつている。即ち觸に於て能動と所動とが交互に現するものと云うべきであらう。之は一種の矛盾であつて、この様な觸と三事とが前後に循環し矛盾するのは、觸の構成要素としての根境識の三事を、一々分析すると共に、緣起としての觸を實有とした所にその原因があると云うべきである。原始佛教に於ては、心心所と俱に有る觸を先驗的に捉え、且つ直觀的に知見して、此處に契機を把えて生滅を解脫せんとしたのである。

識と根とが何れが優先するかの問題、心心所と觸との矛盾的循環等は、全て時空兩面に亘つて、阿毘達磨的に觸を分析した結果、生起した所の混雜である。此の混雜を解決せんとして唯識と中觀との努力が拂われ、遂に兩學派の發達を見たのである。解深密經第一心意識相品では、身に於て隨逐執持するが故に阿陀那識と名づけ、身に於て攝受藏隱し安危の義を同じくするに由るが故に阿賴耶識と名づくことせられ、(成唯識論第三に「能く諸法の種子を執持し、及び能く色根と依處とを執受し、亦能く結生と相續とを執取するが故に此の識を阿陀那と名づく」とあり)觸と名色と五蘊とにおける識の循環的な矛盾を、阿陀那識と阿賴耶識とで説明せんとした。而して三事和合の識にひたすら解決を求めんとした結果は、同じく分別瑜伽品第六の分別止觀唯識門に、「毘鉢舍那三摩地所行の影像是その心と異なる事なし、影像是意識のみなるによる。識の所縁は唯識の所現に過ぎない。愚夫は諸の影像に於て如實に意識のみなる事を知らず」として、意識の中に根境識の三事を移入して、之を如實に知ることが、解脫への契機をなすことを明かにした。即ち三事和合觸の如實知見を、意識内の如實知に移行せしめて、有部の觸考察の矛盾を解決せんとしたのである。中觀佛教も亦この解明の爲に努力している。即ち青目は中論觀行品十三、第二偈を釋して、「識は塵と根とに因つて生ず、識は塵にも根にも又はその中間にありとも分別し難し、識は

衆縁より生ず、空にして自性なし」とし、識は空なりと見てゐる。同じく四諦品二十四第九偈には「二諦を分別することを知らざれば、甚深の法に於て實義を知らず」とし、虛妄の法は世俗諦には實なるも、第一義諦には空、無性なりとし、(S. 12. 15)には「正慧によつて如實に世間の集と滅とを觀ずれば、世間に無なるものなし、有なるものなし」としてゐる)更に第十六第十七偈に「自性ありと云えば無因無縁となり、又因果と生滅の理とを共に破することとなる」とし、第十八偈では「彼の縁起其を我等は空と説く、其は相對的な施設である。又中道の義である」とした。觸は空にして三事共に自性なく、自性に執することは、因果と生滅の理とを破するものとし、縁起を以て空甚深とした。即ち原始佛教の生滅觀の(一三七頁下一行)(五行參照)傳統を認めつつ、縁起を相對的な施設であるとして、原始佛教の觸考察を肯定しながら、中觀の空思想を展開したのである。

佛教の縁起説は、原始佛教に於ては觸甚深を以て示され、(S. 35. 15)「觸の法は知り難く無智者は之に惑う、覆われたるものに黑闇あり、見ざるものに盲冥あり」甚深把握の契機を如實知見に置いているが、有部は時空二種の實有を如理に思惟することを甚深とし、唯識の甚深は原始佛教の觸考察を識内に把えて、之を如實に知ることであるととし、中觀佛教は觸考察を法空に沈めて空甚深としたのである。